
彩配の繰り手

義已暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彩配の繰り手

【Nコード】

N0682BA

【作者名】

義已暁

【あらすじ】

貧乏長屋暮らしの画家ユウハ・ルーミオ。滞納家賃を稼ぐ為、宮廷絵師の選抜試験に挑んだユウハはあっさりと一次試験に合格してしまう。高貴な身分に興味は無いけど、参加賞（銅貨二十枚）の為に王宮に出向いたユウハ。そこで懐かしい再会と王位を巡る陰謀に巻き込まれる。

生と死、責任と運命に翻弄されるひたむきな少女の物語。

この小説は小学館ガガ大賞一次審査通過、二次落ちした作者の初

投稿作です。

前哨 薄墨の顔、路傍の似顔絵描き（前書き）

始めまして！ 義已よしあきです。

画家の少女が主人公の異色魔法モノ？ です。初めのうちはコメデ
イタッチですが、途中グロくなるかもですのでそれでも宜しい方は
読み進めて下さいまし。

前哨 薄墨の顔、路傍の似顔絵描き

薄汚れた深緑の長衣が地面に擦れて埃を巻き上げる。目深に被られたフードから覗くのは藁色の髪と琥珀色の瞳。頬や腕には擦り傷が垣間見え、痩せた華奢な身体は煉瓦の壁に寄り掛かり膝を抱え込んだ体勢のままだ。

少女は喧噪の中静かに視線を彷徨させた。

(成果はなし……と)

地下街に続く階段の脇でスケッチブックと鉛筆を抱えたまま少女は溜息を吐く。王都の中央通りは夕刻にもなれば人で溢れるが、生憎と彼女の前で立ち止まる客はいなかった。視線の先には空き缶が立てられている。

勿論中身は空っぽだ。

少女は恨めしげに空き缶をつま先で蹴っ飛ばす。カラランツ……物悲しく転がったままの空き缶に空しさが湧いてきて、本日十二回目溜息を吐いた。

少女の名前はユウハ・ルーミオ。路上で似顔絵描きを生業とする貧乏画家だ。

毎日ねぐらとする地下街の長屋から、煤汚れた小路を抜けこの中央通りに詰めているが、客入りは人波に比例して増えたりはしなかった。日中殆どの時間をここで過ごす為、口はカラカラに渴くし、馬車や人波に煽られて砂埃を被った身体は全体的に白っぽい。それでも十日通えば銅貨を五・六枚稼ぐ日もあるので疎かにする訳にもいかない。

ユウハは沈みかけた太陽が地面に揺れるのを見て渋々立ち上がる。

今日はもう客は来そうにない。日が完全に沈めば表道といえども治安は悪くなるし、灯を買う金も無い。早々に引き揚げなくては暗闇の中、地下を彷徨わなくてはならなくなる。

裾の埃を手で軽く払うと、商売道具でもあるスケッチブックを靴に突っ込む。継ぎ接ぎの靴は所々解れているが、使えれば問題は無かった。

階段の手摺りに手を掛けて、つま先をトントンと叩いていると、後ろから肩を掴まれる。いきなり後ろに引かれたのでユウハの身体はグラリと傾き、慌てて手を前方へ突き出してバランスを取ろうとする。その腕を引き寄せられ、いつのまにか見知らぬ黒衣に抱き寄せられていた。

「あぶ！……えっと、あの一、済みません？」

バランスを崩したのはユウハだが、そもその元凶は彼の人だ。

むつとするべきが一瞬迷つて、しかし取り敢えず謝っておく。相手が誰か分からないのに喧嘩を売る訳にもいかない。

「……済まぬ、驚かせたな」

黒衣の人は押し殺した低い声でユウハの耳元に囁いた。仰ぎ見る

と、その男の碧眼と視線ががちあい目を見開く。

（……貴族だ、この人）

襟元から覗く質の良いタイと、金糸で縁取られた上衣でそこらの平民ではないと当たりを付けたユウハはさっと身を引いて顔を伏せる。

「私が、何か？」

「店仕舞の所悪いが、少し時間を取れまいか？」

黒衣の男は、頭二つ分は小さなユウハを身下ろして急いだ声で問う。男の言葉にユウハは顔を上げた。

黄昏に暮れる陽を浴びて、男の紅髪は炎のように揺らめいていた。

「その馬車の前にいる男を描いてくれ」

男の言葉に慌あわてて指差された方を見る。そこには今まさに馬車に乗ろうとしている壮年そうねんの男がいた。

「あの灰色はいいろの髪の方ですか？」

ユウハは壮年そうねんの男を視界に入れながら、スケッチブックを鞆かばんから引き抜く。

「そうだ、済すまぬが急いでくれ」

黒衣の男はそう言いながらも、馬車の方へ鋭い視線を縫ぬい付けたまま、ユウハの肩を掴つかんでいた。掴つかまれた肩が軋きしんで痛みを覚えたユウハは、眉まゆを寄せながらも鉛筆を走らせる。どうやら訳有りらしい客は、描き終わるまで手を放はなしてくれそうにない。

「……これで宜よろしいですか？ ロード」

さっと走り描きした絵を顔の前に掲かかげて見せると、男は目を見開いてスケッチブックを破やぶっていた。

「驚おどろいた。……これなら見失みうしなつても後を追えそうだ。礼を言う」

スケッチブックと一緒に硬貨こうかを押しつけて、男は角かどに消えた馬車を追おって走り出してしまった。男が完全に視界から消えたのを見送ると、ユウハは掌てのひらの中をそろそろと覗のぞきこんだ。

掌てのひらの中の硬貨こうかは黄金色こがねいろに煌きらめいていた。

「……本物ほんもの、よね？」

ユウハの手の上ではバウティアヌス十二世の横顔が捺おされたバウール金貨きんかがぴかぴかと存在を主張しやうじやうしていた。記憶きおくが正しければマルーア銅貨千枚分の価値かちがある筈はずだ。

「どつすればいいのよ、コレ？」

平民へいみんが持つには荷が重すぎる金貨きんかに、ユウハは頭かかを抱かかえた。取り敢あえず、夜道よみちは照あらせそうではあるが……。

沈み込む陽に急かされて、ユウハは地下街への階段を駆け降りた。

前哨 薄墨の顔、路傍の似顔絵描き（後書き）

間違いや読みにくい箇所があれば変更します。
感想など気軽に頂けるとうれしいです。

ではこれから投稿出来るように頑張ります！

序章 地下の魔都、始まりの一石（前書き）

2話です。ボリュームが足りないかも？
済みません……不慣れなもので。

序章 地下の魔都、始まりの一石

地下街の小路は蜘蛛の巣のよう。張り巡らされた糸の全貌は誰も知らない。

僅かばかりの灯が揺らめき、羽虫が群がる。混ぜ物の酒の臭いと濁った空気が其処ら中に振り撒かれ、あばら屋が今にも軋みそうに歪みながら積み重なって出来た街。家々の境を見分けるのは例え七歳から暮らすユウ八にも至難の業だ。

今はもう長衣は脱ぎ去って、身体にぴったりと張り付く黒の短衣に錆色の短いズボンという出で立ちだ。腰には縁に刺繍の入った巻きスカートが足首まで落ちている。それはユウ八が歩く度ふわりと風を含んで揺れ、埃から足元を守ってくれていた。

薄手の布靴で路傍に転がる酔っぱらいを端へと蹴り除けながらユウ八は家路を急ぐ。鞆の中にはスケッチブックと鉛筆、それに木綿の手巾にしっかりと包まれたパウエル金貨が一枚。本物であれ、偽物であれ、大層な物を抱え込んだ自覚はあるので自然と早足になつてしまう。

「まったくもう。こんなもの貰ったって換金出来るわけないし、其処らに捨てたりも出来ないって。本当お貴族様の考える事は、貧乏人には理解出来ないわ」

「厄介な事に巻き込まれなきゃいいけど……」

無意識に鞆の紐を握り締めて苦い顔になっていたユウ八は見慣れた長屋の前でハッと正気に戻る。

「いけない。あんまり挙動が変だと皆に不振がられるか」

そろりと長屋の戸に手を掛けると、聞き慣れた人の声が頭から降ってくる。ユウ八は直ぐ脇の戸から顔を出している女性の形相に、ぎくりと顔を凍らせる。

「ユウ八、遅かったじゃないか。さぞかし今日は繁盛したんだろう

ねえ？」

「……そんなことも、ないよ？ マヌサ小母さん。」

にやりと笑いながらも冷気のこもった声音で詰め寄られ、思わず一歩後退。

「んじゃあ、何時になつたら家賃は払って貰えるんだろうねえ？

そりゃこの長屋はあんただけじゃなく貧乏でろくでなしな絵描きが指で数えるほど住んじやいるが、それでも叩けば銅貨一枚位は出てくるだろうさ」

「ごめんなさいっ！ 今日稼ぎが無くて……。お金が入ったら直ぐに払うから！」

両手を重ねて上目遣いでマヌサを窺い見ると、やれやれと首を振って盛大な溜息を吐かれてしまった。

「まあ、あんたの事情も察するよ。その年齢で一人前の画家として食ってけるなんて土台無理な話だからねえ」

そう言うとはんぽんと頭を撫でられる。何だかんだ言ってもマヌサ小母さんはユウハに甘い。十二年も前から住んでいるせいでもう、家族同然だからだろう。

ふと、頭の上で弾んでいる物に気が付くとユウハは首を傾げた。

「小母さん、その紙束なに？」

ああこれ？ と紙束の内の一枚の紙を広げて見せた小母さんにはやりと不敵に笑った。

「こりゃ、宮廷絵師募集の案内さ。選抜試験に合格した奴が王城に召し抱えられる一世一代の機会とあれば、ユウハも出ない理由はないよねえ？」

ひくつと引き攣ったユウハの唇からは呻き声しか出ない。

「わたしみたいな、無名画家が選ばれるわけないよ。高望みし過ぎだつて」

「なあに、別に本当に選ばれなくてもいいさ。一次試験に合格した者には銅貨二十枚の報奨金が与えられるんだと。ユウハ、駄目元で一次位受けてみなよ」

「でも……」

「でもってなんだい！ あんたは私の為に家賃を払ってくれる気は無いんだね……」

ジト目で睨まれユウハは頭を抱え込んで唸る。

「わっかつたっ！ 分かつたっ！ やります。やらせて貰いますともっ！」

やけくそになって叫んだユウハにマヌサ小母さんはにんまりと笑った後、ぼんつと紙束と一緒に分厚い封筒を投げて超越した。

「そっちは、ヴァンからの手紙だよ。フン、あの筆不精め、ひと月も連絡超越さないでちゃんと生きてるのかねえ？」

ユウハは顔を輝かせて手紙を受け取ると、慌てて自分の部屋に滑り込む。

「小母さんありがと、おやすみっ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0682ba/>

彩配の繰り手

2012年1月2日00時50分発行